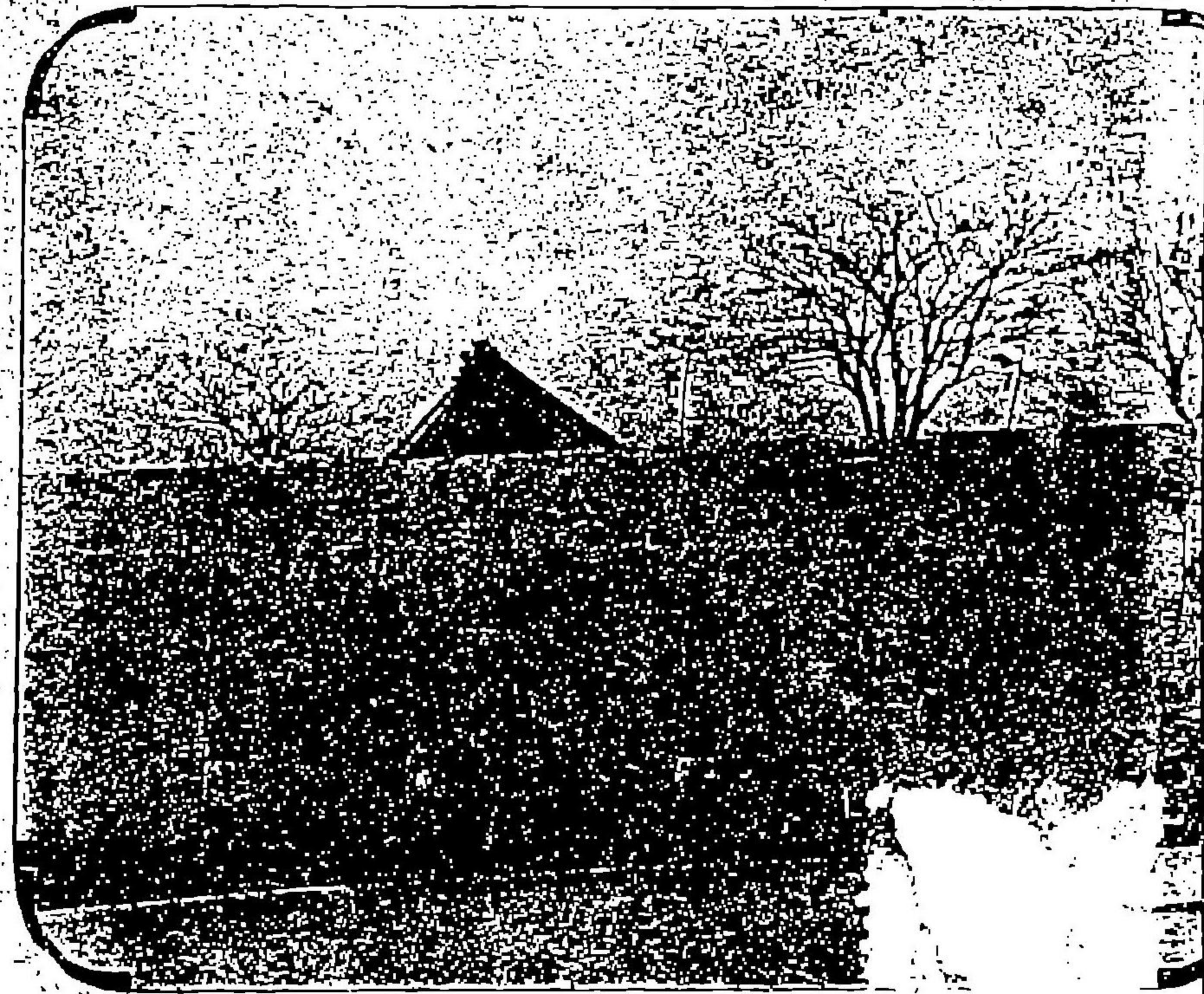


大阪城沿革小史

陸軍歩兵少將伊豆丸夫校閱
陸軍歩兵中尉上田 著



(石蛸) 城内大石
横拾九尺 三拾六尺五寸

025214-000-9

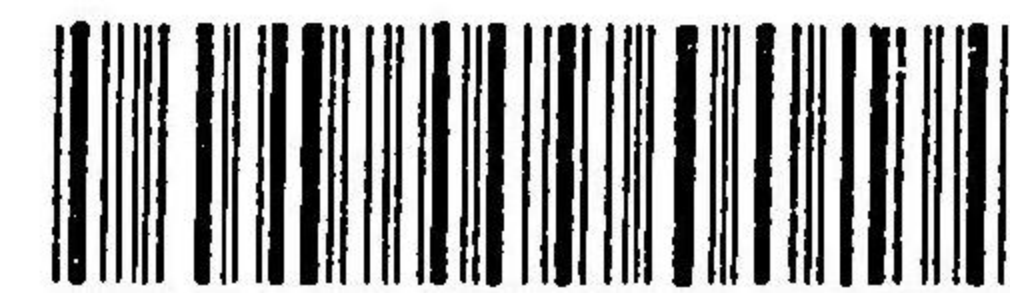
特53-559

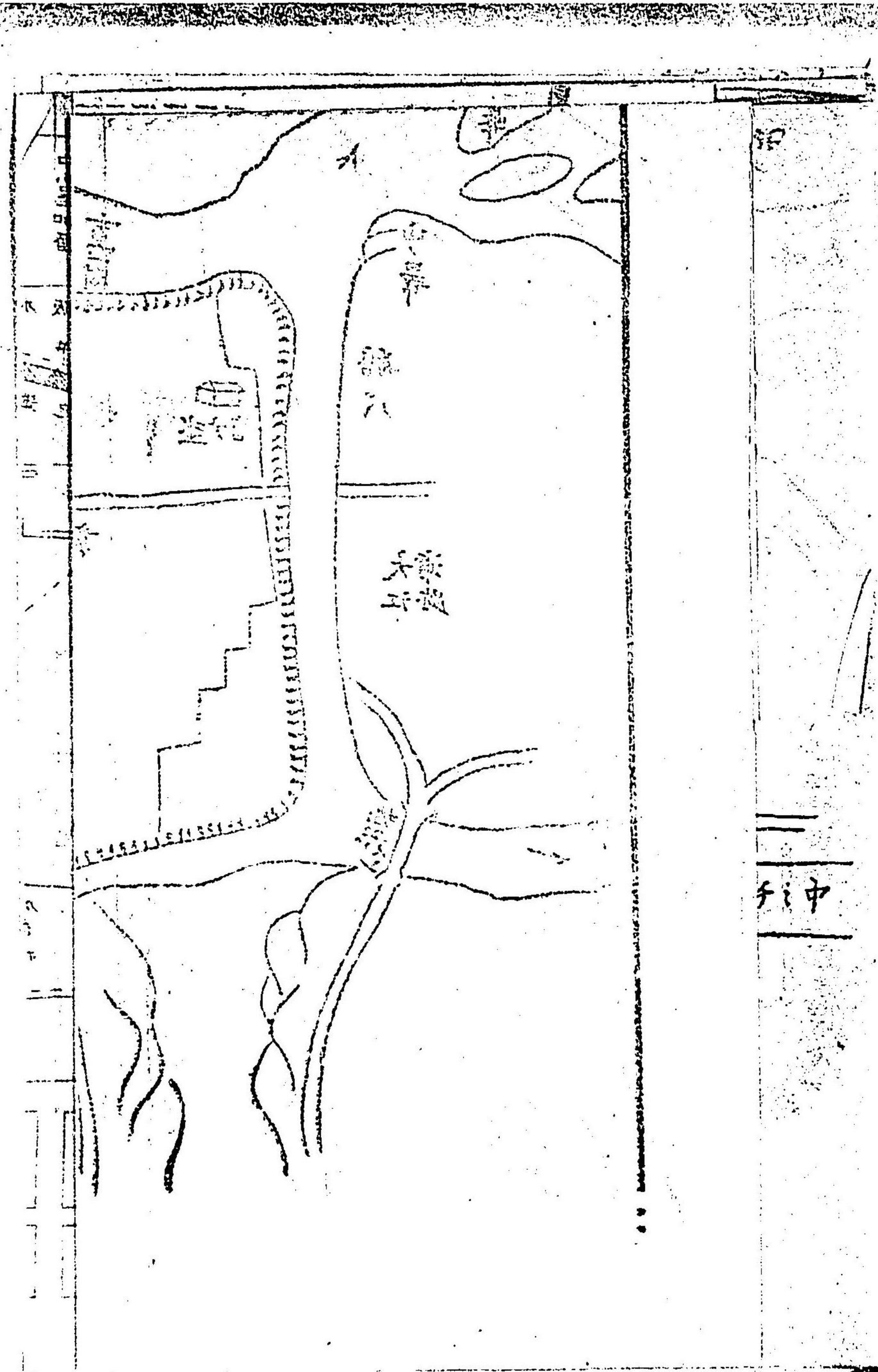
大阪城沿革小史

上田 颯 / 著

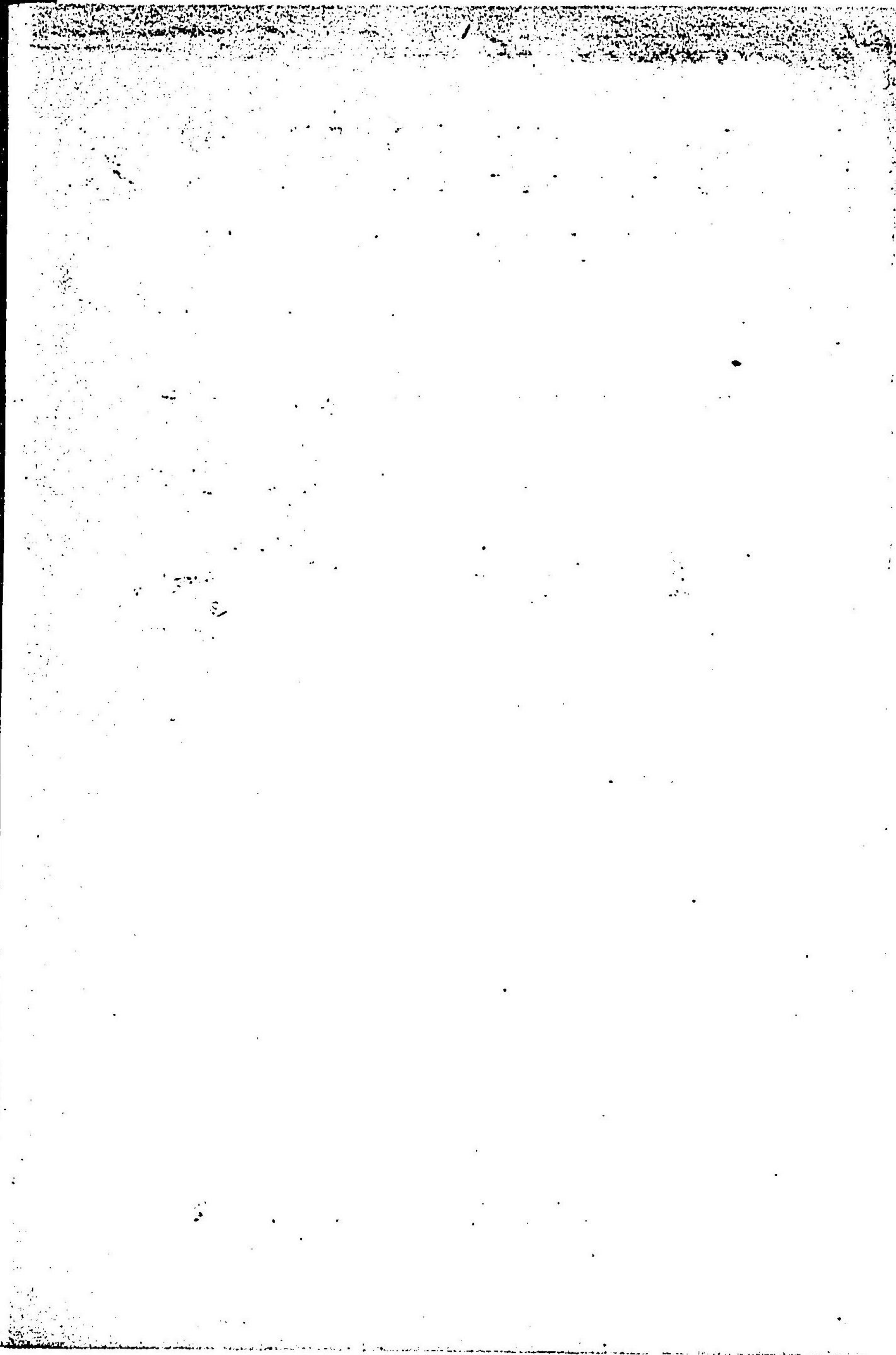
M44

ADC-2614



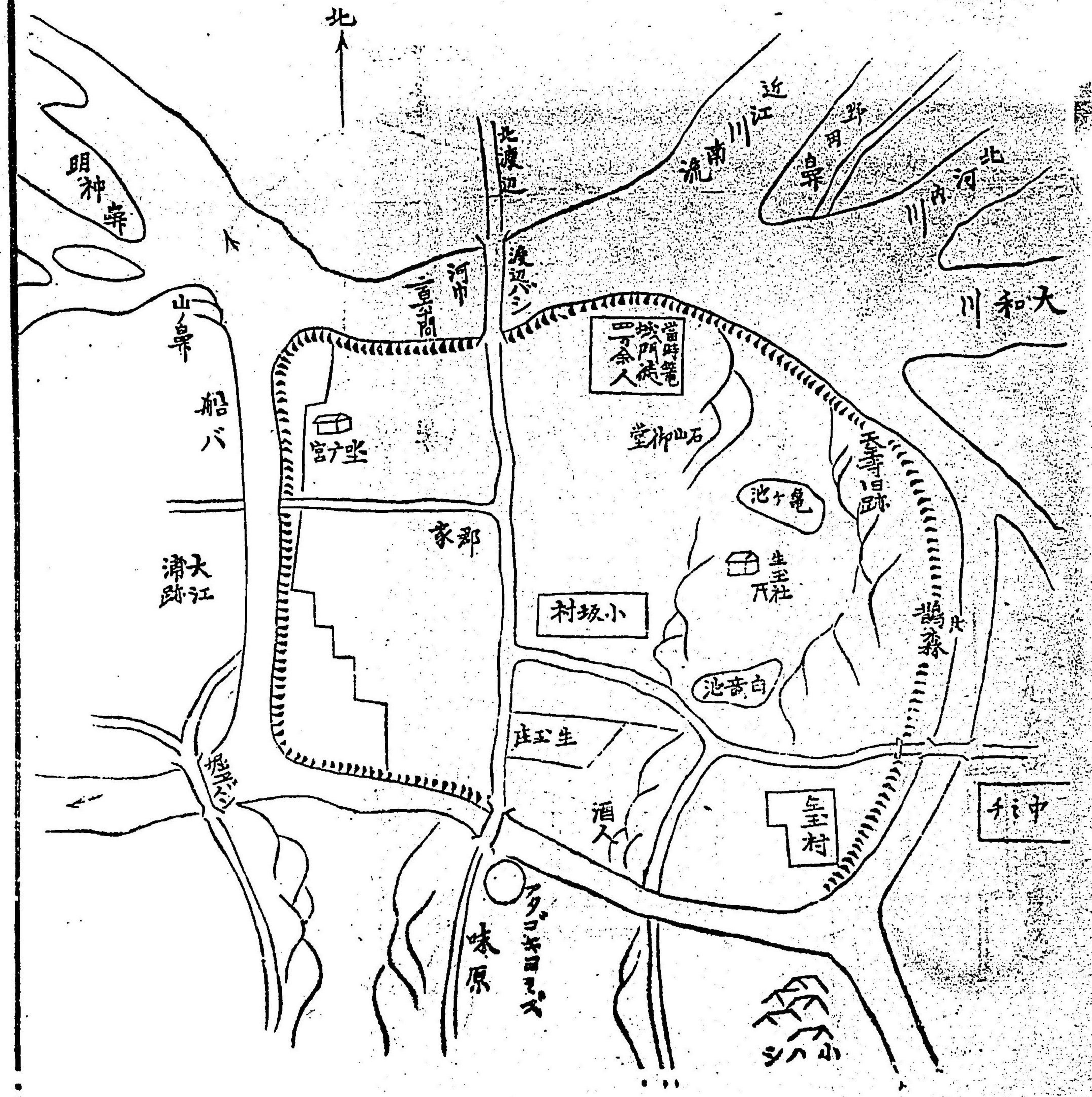


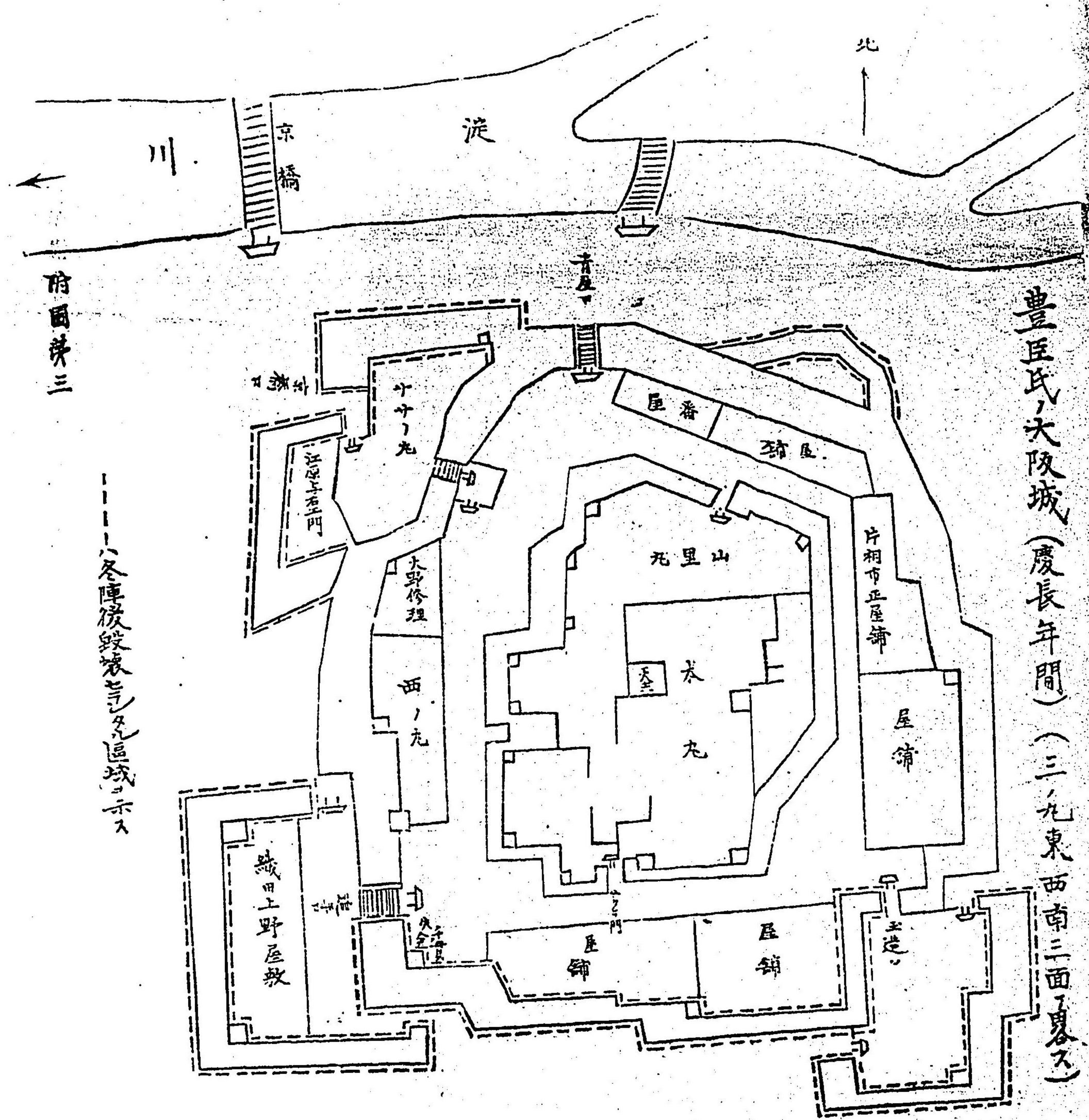
轴中



石山本願寺總構之圖

附圖第一

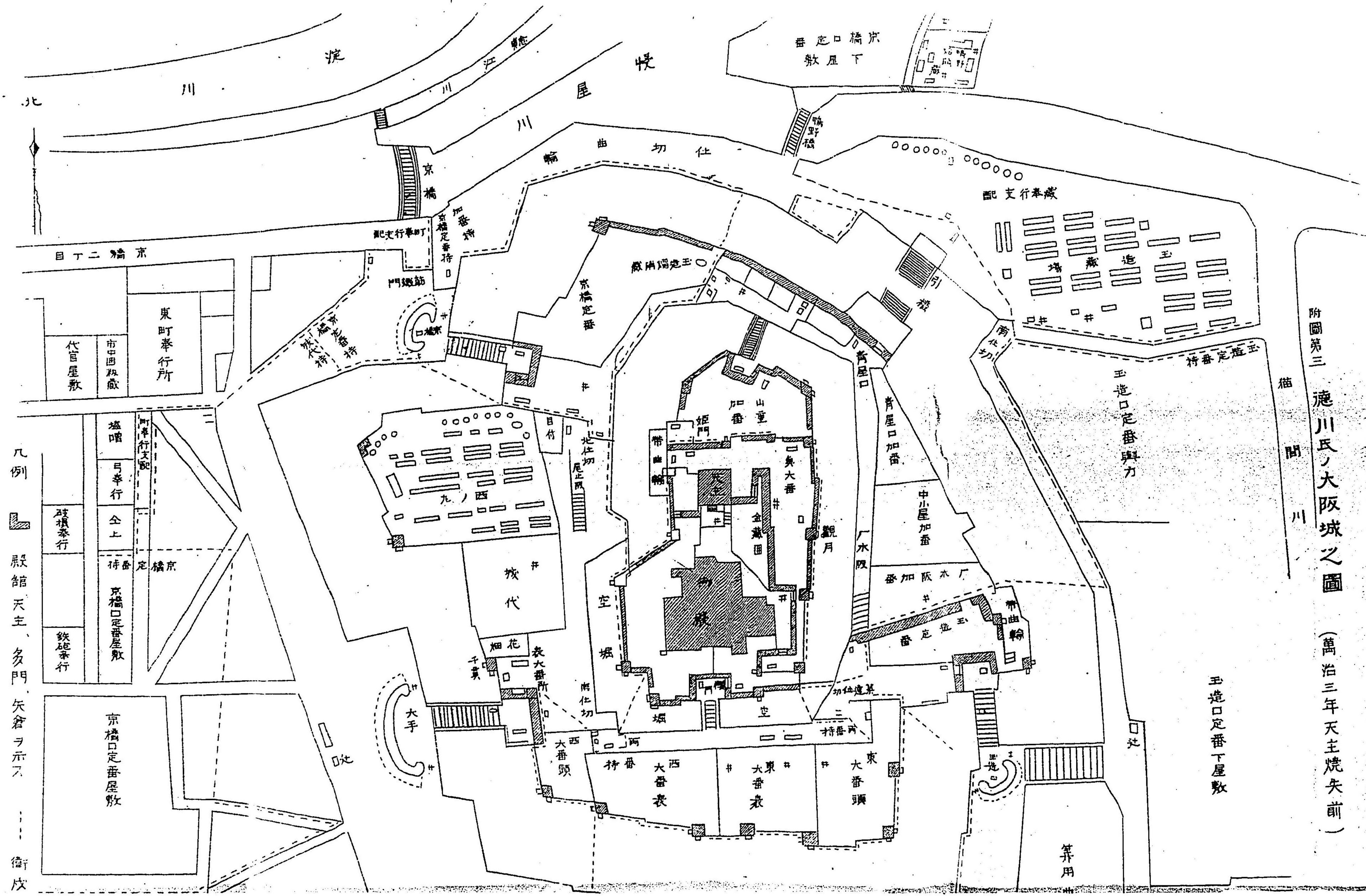




豊臣氏、大坂城（慶長年間）（三ノ丸東西南三面、夏不）

附圖第三

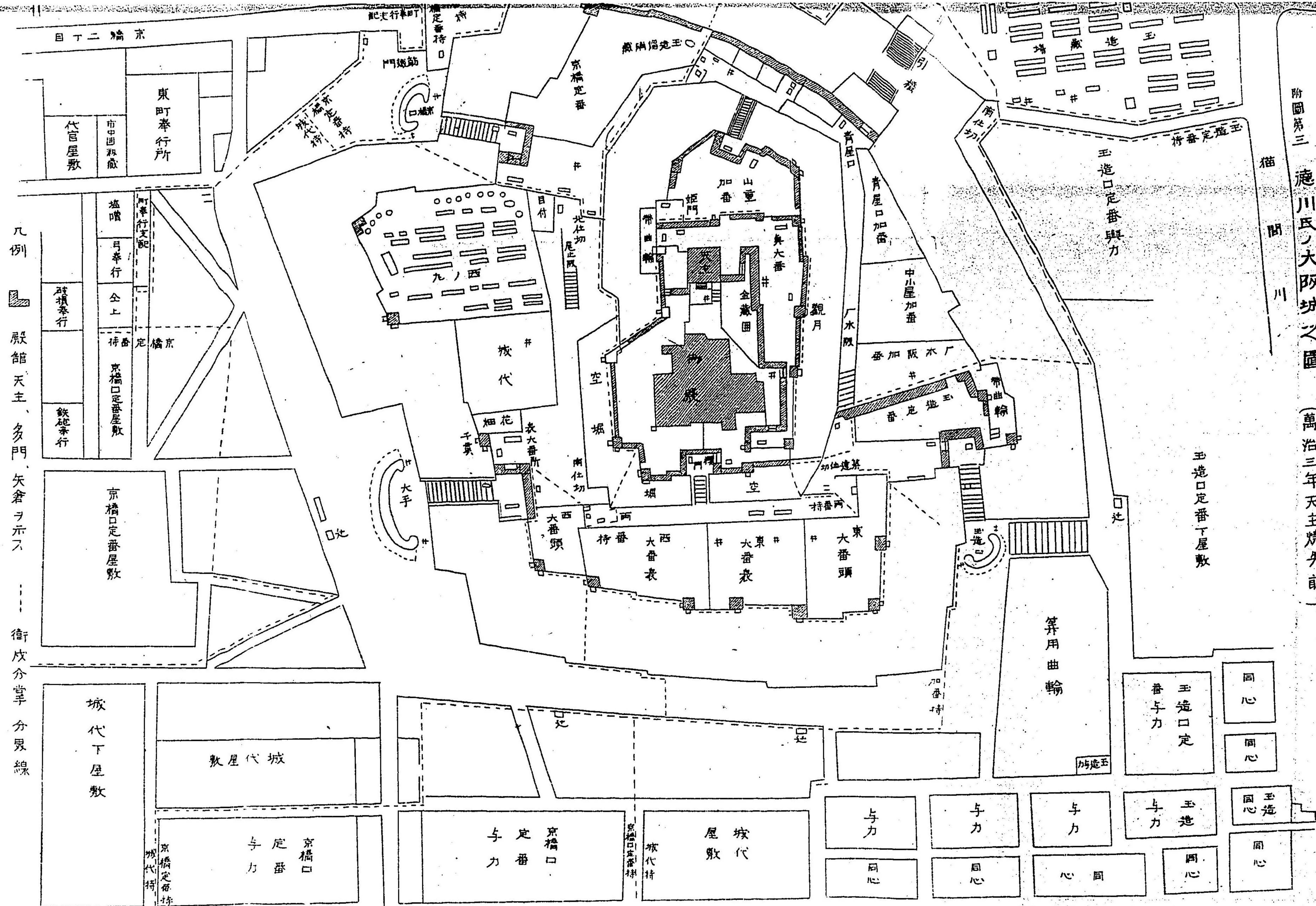
--- 各陣被毀壞等区域を示す



附圖第三 德川氏ノ大阪城之圖 (萬治三年天主燒失前)

凡例
 殿館天主、夕門、矢倉ヲ示ス
 衛戍

德川氏ノ大阪城之圖 (萬治三年天主燒失前)



附圖第三 德川氏ノ大阪城之圖 (萬治三年天主燒失前)

凡例
 殿館 天主 多門 矢倉ヲ示ス
 衛戍分掌 分界線

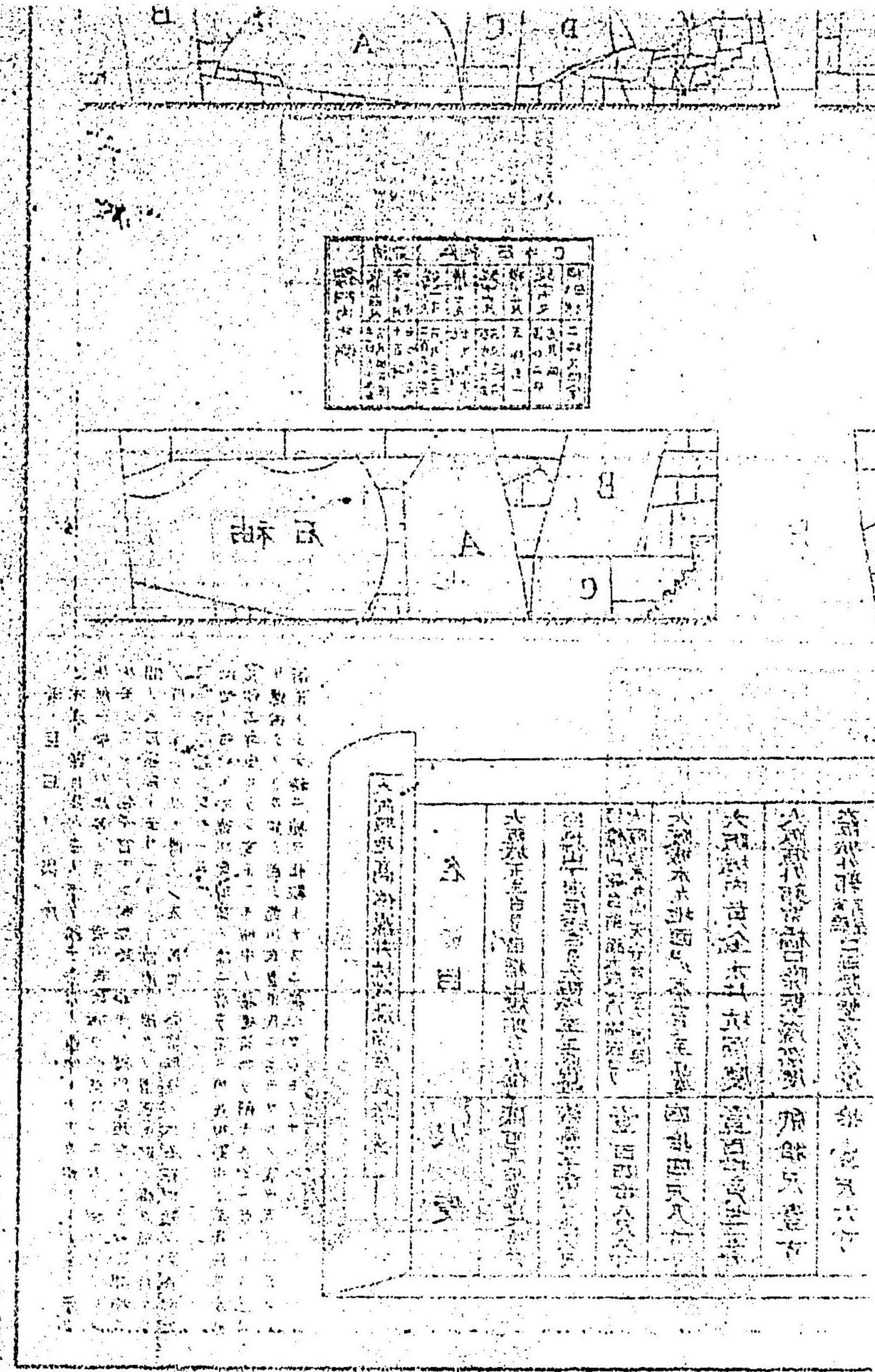
德川氏ノ大阪城之圖 (萬治三年天主燒失前)

自序

新を知り故を温むるの情は人文の發達に伴ひ益々見は
 るるの現象なりと云ふべきか大阪城の如きは中世以降
 大阪市の繁榮と其關係最も密接なる歴史を有するか故
 に今時足を阪地に入るもの必ず先づ大阪城趾の縦覽を
 冀はざるはなきの狀あり是れ縦覽者の數近年激増せ
 に徴し明白なり

世大阪城に關する史書に乏しからず然れども多くは
 冊にして携行に便ならず且つ其所説亦異同あり予淺學
 到底史書を草するの質にあらずと雖城趾縦覽者の便を
 計らんとするの微意あり公務の餘暇を利用し數種の史

大正12年
 4月22日
 大正12年



補もなし最後に師團長の更迭異動を添へたり

一、又一友あり曰く此書軍人の執筆としては軍事専門眼より觀たる何事かの記事なきは遺憾ならずやと予も亦始めより之を思はざるにあらざるも之等は諸大家の己に研究を遂げられたるものあるべく且つ予の淺學を以てしては餘り大膽に過ぐる業と思意し止みてありしか此の度は大に勇を鼓して築城術より觀たる大阪城と題し卑見を述べたり冀くは大方諸賢の叱正あらんとを

明治四十三年九月

編者識す

凡例

一、予本來史書を物するの質にあらざることば初版に於て斷り置きたる所なれども其後不完全の記事たることに氣付きたる箇所あり茲に深く其の輕卒を謝し本版に於て悉く訂正せり

二、本版を發行するに先ち豫て大阪城のことにつき研究せられつゝありと聞きし文學博士辻善之助氏に査閱を請ひたるに快諾を與へられ種々示教を受け大に改めたる所あり

三、友あり予に告げて曰く明治維新以降の記事は餘りに單簡に過ぎすやと予も亦其の然るを信し訂正もし増

書中に其要を摘り最も信據するに足る事項を選ひ一小冊子と爲し大阪城沿革小史と名つけ之を世に公にするに至れり借越の罪固より深し
本書を纂輯するに當り多大の指導を大阪陸軍地方幼年學校教授山下四郎氏に仰きたりと雖予の不敏にして字句妥當を缺き排列亦宜を得ざるは大に遺憾とする所にして専ら江湖の諒察を乞ふ所以なり若し夫れ世の大阪城距を縦覽するの人士幸ひに本書に依りて幾分裨益する所あらは予の本懐之に過さず

明治四十三年四月

編者識

大阪城沿革小史目次

大阪城沿革小史

- 一、地名の起原……………一
- 二、大阪城の地形……………二
- 三、大阪城の創建……………三
- 四、大阪城の變遷……………四
 - イ、石山本願寺時代……………四
 - ロ、豊臣氏時代……………六
 - ハ、徳川氏時代……………一三
 - ニ、明治維新以降……………一六
- 五、築城術より觀たる大阪城……………廿一

- 第一、石山本願寺總構之圖
- 第二、豊臣氏の大坂城の圖
附秀吉の築城
- 第三、徳川氏の大坂城の圖
- 第四、大坂城 著 大石壁圖
附巨石の出所
- 第五、明治元年焼失前の天主臺圖

大阪城沿革小史目次(終)

大阪城沿革小史

步兵大佐 伊豆凡夫校閱

歩兵中尉 上田 麿 著

一、地名の起原

日本の最古史日本書紀(皇紀千三百)に「神武天皇東征して難波に碇に著き給ひしに潮流甚だ急なりしかは浪速の國と名づく又浪華と云ふ今難波と云ふは訛れるなり」と又同書第十五代應神天皇(皇紀九〇〇年即位)の條に此國を津の國と稱する事あり津は集の義にして港の意なり其攝津と稱するは第四十代武天皇(皇紀一三三三年即位)の時難波の大宮(今の難宮)ありしを以て宮監とて其難宮所在地に在りて

宮中の事務を司れる者を置き兼て津の國を總攝せしむる爲攝津職を設けたるに後世其職名は廢せられ國名となりて殘れるなり土御門天皇の明應五年(皇紀二二五六年)に至り本願寺第八世僧叡壽(申興の祖云)生玉莊内小坂(古岡に據れば今の上本町邊に)の東北に當る石山に本願寺の別院を創建せし頃より大坂と書すること漸く史書に見はれ來れり其意大江(難波江の一名)の阪の略訓なるか或は小坂の部落より發達し來りしに基くか或は兼壽の創意に出づるか今之を詳にし難しと雖最後に生したる名稱にして古言にあらざるは確實なり

二、大阪城の地形

大阪の地東北二面は大和、河内、山城及攝津の諸峰環繞し西は海に

瀕し南は潤り地勢廣壯なり淀、大和(大和川は徳川氏の世に)の諸大河會流し難波の海に朝し五通四達の要津にして京畿の咽喉たり而して大阪城は此平野の稍々西に偏し難波大東の東邊に連亘せる一帯の丘阜の北角最高部に在り一望千里の勝形を占め東北両面に大河を背ひ西は海を控り城砦としての要害自然に備はれり然も之に巨資を投し不備を補ひ壘壁塹壕を設く所謂金城湯地天下無比の堅城たるを得る所以にして諸侯を風靡し天下に覇たりし織田信長にして攻圍數年遂に坂く能はさりしが如き智勇兼備の徳川家康にして陋劣なる詭策を用ゆるにあらざれば陥るゝ能はさりしか如き亦偶然にあらざるなり

三、大阪城の創設

大阪城の地は前述の如く僧兼壽が石山本願寺別院を創建せし所にして後三十六年(天文元年皇紀二一九二年)孫光教(第十世證)の時京都日蓮宗徒及佐々木定頼の連合軍の爲山城國山科本願寺本山焚毀せられければ光教祖像を負ひ此別院に逃れ此を本山と定め隣國の門徒を催し伽藍を修め當時一向宗一揆の盛なりし加賀國より築城工を招き壁を高うし壘を深くし遂に城郭と爲せり大阪城の權輿實に茲にあり

四、大阪城の變遷

(イ) 石山本願寺時代

斯くて一向宗(本願寺)と日蓮宗と睥睨反目すること益々甚だしく遂に京都二十一個寺の宗徒は細川晴元、木澤長政等と連合大舉し此城

を攻むること二回に及びしも光教防戦して敢て敗れず能く其勢を張れり永祿七年(皇紀二二二四年)十一月に至り此の城火を失し伽藍悉く烏有に歸せり時に光教既に寂し子光佐(第十一世)嗣たり翌年更に大に工を起し伽藍を再建せり之に於て宗門益々隆興し兵強く財満ち其勢力頗る雄大となれり後六年元龜元年(皇紀二二三〇年)細川昭元、三好政康等四國より來り本願寺に接近せる野田、福島に城を構へ織田信長と戦ふや光佐毛利氏の援助を得て兵を出し三好等を助け信長に當りしかば信長遂に克たすして京師に遷れり是れ光佐、信長と戦端を開きたる始めとす同三年三好等信長に降り光佐亦信長と和を修せしも天正二年(皇紀二二三四年)に至り信長兵を發し長圍持久之策を立て支城を設け石山本願寺を攻圍せり光佐亦防備を嚴にし

之に抗し敢て屈せず天正八年三月正親町天皇の勅命により此年四月光佐紀伊國雜賀鷲森に退きしか其子光壽(教如)尙屈せず再舉を圖りしも終に保つ能はず同八月城塞寺宇を擧げて信長に致せり實に光佐、信長と兵を構へてより十一年なり然るに光壽轉退の際城中火を發し燄々熄まざることを三晝夜滿城の伽藍坊舎悉く舞馬の蹂躪する所となる信長此に番衆を置き守衛せり

(四) 豊臣氏時代

天正十年六月信長明智光秀に弑せられ羽柴秀吉山崎の一戦を以て光秀を滅し威名漸く重く天正十一年賤ヶ岳の戦に於て驍將柴田勝家を滅ぼし天下の大勢略ぼ定まるに及び益々經世の壮志を起し謂らく京師の地山勢紆塞漕運の便を缺き且土地狹隘にして諸侯の邸宅を列す

る能はざるに反し大阪は河海を襟帶し地勢宏敞天下に號令するに足るとなし遂に石山本願寺趾を修拓し府城と爲すに決し此年(天正十一年)七月命を諸侯に傳へ巨石良材を献せしめ命を天下に布き川餘國の人民を發し大に工を起し同年十一月略々竣工するに及び秀吉此に移り七道を統轄せり(此大工僅々五箇月にして其大部を終りしは蓋し本願寺時として餘工は其後繼續し同十三年に至りて全く大成せり)文祿二年(皇紀二二五三年秀吉)秀頼此城に生る當時秀吉肥前名護屋に在りて征韓軍を總攬せしか偶々明國和を乞ひ休戦せしを以て歸城せり同四年三月伏見城(文祿三年築く所)に移り慶長三年八月(皇紀二二五八年)同城に於て薨す時に年六十三嗣子秀頼年甫めて六歳なりき

慶長四年正月秀頼伏見より此城に歸り又大に増築する所あり之よ

り先き秀吉の遺命により前田利家は秀頼の養育に任し徳川家康は伏見に留まり政務を攝行せり然るに閏三月利家病みて卒し征韓軍に従ひし諸將休養の爲め相前後して歸國するや家康此城西ノ丸(追手門の中間の)に入り漸を以て己れ豊臣氏に代り天下に覇たらんとするの意あり而して同五年關ヶ原に捷らてより威勢頗る加はり兵馬の實權其手に歸せしかば擅に賞罰を行ひ諸侯の秩祿を増減し其封邑を移易し大に海内を一新し遂には秀頼を封して攝、河、泉六十五萬七千四百石の大名となしたり而して家康は同六年大阪を去り伏見に居り八年征夷大將軍に拜し其十月江戸(天正十七年)に歸り是より名實兩々其掌握する所となり海内の政令悉く關東より出づ

既にして秀頼長するや秀吉の宿將(大野治長弟治男織田有樂其子長孝木村重成等にして多くは功名利達に惹かる諸

侯若くは失意不(ら)等相議し潜に勢力挽回に腐心するの際會々京都方廣寺梵鐘銘辭の事あり茲に豊臣、徳川兩氏宣戰の動機を作し旗鼓の間に相見ゆるに至れり實に秀吉歿後十六年にして皇紀二千二百七十四年慶長十九年の事なりとす

此時秀頼(時に二十二歳)の將大野治長等大阪城の防備に任し堤塘障壁樓櫓を増設し川流を堰きて氾濫を爲し野田、海老江、中島、傳法、九條に戍兵を置き港口に關船を備へ城南空堀(三の丸)には亂杭を樹て専ら防備を嚴にせり家康は同年十月諸將を率ゐ駿府を發し其の月二十三日京都二條城に着し十一月伏見に入り轉して河攝に進み家康は住吉に子秀忠は平野に陣し同月十八日茶臼山に來り會し部署を定め翌十九日攻撃を開始せり而して先づ淀川本流を鳥飼、長柄に於

て堰き水路を神崎、中津の両支流に轉し天満、東横堀の水を涸らし大阪城を環りて布營し同年十二月九日總攻撃に移り而して一方に於ては巧に奇計詭策を放ち其月十九日遂に徳川軍に今宮、天王寺、船場を経て天満に亘る三里餘の總構へ（開戦前大阪軍に於て急造したるものなり）を豊臣軍は二ノ丸、三ノ丸は堀及柵を撤去すへき條件の下に和議を結ひ二十三日より破壊工事に着手し家康は同二十五日東歸し秀忠留りて後事を督し家康の密旨により詐謀を弄し盟約以外に屬する二ノ丸の壕及び石垣を毀ち越えて翌元和元年正月十八日に至る間に於て二ノ丸の追手、玉造、三馬出曲輪及南曲輪の埋、壘壁、門、櫓等の悉くを破壊若くは填埋し故らに本丸櫻の門前を一般の通路と爲し諸勢を撤退し東歸せり之を大阪冬の陣と稱す

斯の如くにして稀世の英傑秀吉が大に心を盡し天下の財を傾け經營したる堅牢壯嚴前古に絶したる名城の金湯は破られたり然も老照なる家康の術中に陥り此に至る秀頼母子終天の恨事たるは固より豊臣氏の將士亦憤懣の情に堪へざる所なり且つ又此和議たるや固より両家真意あるに非ずして唯一時の權宜に出でたるものなるを以て何れの時期に於てか破綻せざれば止まざるの形勢ありき此年（元和元年）大阪城の殿館を修築し米豆の購入をなせしか此事早くも豊臣氏に戦意ありとなし風評忽ち喧傳するや家康世評を名とし大兵を擁し西上し其威を示し秀頼淀君に懲懾して曰く五七年の後大阪城を故の如く修築し還附すへきに依り其間郡山（大和國）に轉封すへしと轉封の事元より秀頼母子の情に於て忍ふへきに非ず諸將士亦家康の意

を知るを以て之を聽かず使者往還三四回にして東軍既に京都以西に侵入せるを致せり時に大阪に於ては計畫未だ熟せず配備亦完からず所謂守るに堅城なく進むに精兵なき状態にして萬事茲に至りて瓦裂す即ち上下唯一死を賭して恨を家康父子に酬めんと決意し此に再び戦端を開きたり家康又命を下して軍を進め五月六日片山、道明寺、畷田、八尾及若江に於て同七日天王寺、茶磨山、庚申堂、勝曼院、毘沙門池畔、岡山、船場等に於て激戦あり秀頼の軍終に利あらず城中に退き先きに舊外郭跡に急造したる柵及深さ二尺の壕に據りて防戦せしも家康、秀忠等の攻撃急にして抗すへからず此時城中款を家康に通ずるものあり火を放つ偶々大風あり殿館先つ燃へ延て千疊敷、天主矢倉其他悉く灰燼に歸し城兵或は鬪死し或は自殺し或は水火

に焚溺して死し或は間を得て遁逃せり秀頼は淀君等と共に火を避け城中蘆田郭(山里丸)の朱山矢倉(此位置)の下層に徙り此に淀君並士女三十餘人と共に自殺し内より火を放ち燼滅せり時に元和元年五月八日秀頼二十三淀君二十九歳なり之を大阪夏の陣と云ふ天正十一年秀吉此城を招築せしより年を閱する三十二年豊家の社稷と共に此の名城を一炬に付す洵に惜むべき哉

(八) 徳川氏時代

徳川氏は此年六月此城を松平下總守忠明に與へ十萬石を給せしかは忠明荒廢を修め之に居せり同五年七月忠明を郡山に移封し此を關西の鎮府と定の城代を置き同時に大番、在番、加番の制を設け次て東西町奉行を置き同七年京橋口及玉造口に定番を設けたり是より

先き元和六年規月秀忠關以西三十五國の大名六十四家に課して此城を修築せしめ更に寛永元年(皇紀二二八四年)正月及同五年二月に於て三代將軍家光餘工を起し殿廊館榭を造營し前後九年を費し茲に大阪城落成し稍々豊公時代の舊觀に復す然るに四代將軍家綱の世萬治三年(皇紀二二二〇年)六月青屋口火藥庫に落雷し火藥爆發して附近の建築物を破摧飛墮せり其後寛文五年(皇紀二二二五年)天主矢倉雷火のため焼失し後百餘年を経て十代將軍家治の世天明三年(皇紀二四四三年)十月申ねて落雷し追手門其他を焼けり十一代將軍家齊の世天保八年(皇紀二四九七年)二月大阪與力大鹽平八郎黨を結び窮民救濟を名とし亂を起し天滿組屋敷に放火し火箭銃砲を城中に放ち攻めしも克たずして敗死す十二代將軍家慶の世天保十四年(皇紀二五〇三年)大城阪を修築するの議起り大阪の豪商百五十餘名に名し黄金百五十五萬餘兩を献せしめ弘化二年(皇紀二五〇五年)大に工を起し前後十四年を費し安政五年(皇紀二五二八年)殿舎諸門竣工し寛永年間の舊觀に復せり唯獨り天主矢倉の建設を見ざるのみ

元治元年(皇紀二五二四年)五月紀伊中納言茂承幕府の命を受け城に入り本丸に在りて警衛せり同七月戒嚴して追手、京橋、玉造の三門外に馬出胸壁を築造せり蓋し長州藩に備ふるものなり翌慶應元年十四代將軍家茂長州を征するに當り茂承出て、軍に従ひ家茂此城に來りて征長の軍を督せり(寛永三年家光此城に來りてより家茂此城に入城せしま)翌二年家茂病みて茲に薨す

慶應三年(皇紀二五二七年)三月十五代將軍慶喜此城に於て英國公使

を引見し爾後各國使臣との會見交渉多く此城に於てせりと云ふ

(三) 明治維新以降

此年慶喜大政を奉還し此城に隠退し住せり翌明治元年正月慶喜入朝の途鳥羽伏見に於て官軍の爲撃退せられければ再び大阪に歸り海路江戸に逃れたり其去るに際し城中偶々火を失したれば樓屋兵器悉く焼失し唯今尚ほ存する四門 櫻門は其後師團に於て再建せしものなりと數個の櫓とを殘したるのみ安政の修築を距る僅に十年僧兼壽此地を開拓せしより百七十二年焦土となりしこと前後四回なり

大政維新と共に世界の趨勢に鑑み兵制を更むるの第一着として明治二年七月京都の兵學所(明治元年の創設にして陸軍兵學、練兵、建築學給與)を廢し京橋口門内に兵學寮を設け同年十二月生徒を入學せしめ歩、騎

砲三兵科の士官を養成することを始めたり(之を青年學舎と云ふ)是れ今の陸軍士官學校の權輿とす翌三年正月更に生徒を召集し工兵科士官の養成をも始めたり之年五月横濱語學校を此に移し兵學寮の管轄となし幼年生徒を入校せしめ佛蘭西語を教授せり(之を幼年學舎と云ふ)是れ即ち今の陸軍幼年學校の元始なり同年十一月我陸軍は專ら佛蘭西式を採用し兵制を畫一すへき勅命に依り全國の各藩より其大小に應じ生徒百三十餘名を課集し青年學舎に入學せしめたり此年常備編制規則を制定し翌四年八月各藩の兵を解散し鎮臺を設けらるゝに及び大阪鎮臺本部を本丸に置き陸軍少將四條隆詞を鎮臺司令官に補せり同年十月兵學寮を東京に移す七年四月四條少將大阪鎮臺司令官を免せられ陸軍少將鳥尾小彌太之に代る同年八月鳥尾少將大

阪鎮臺司官を免せられ陸軍少將三好重臣之に代る十年西南の役起るや當臺の諸隊之か征討に従事す十三年四月三好少將陸軍中將に任じ東部監軍部長に補せられ陸軍少將會我祐準其後を襲ふ十四年二月會我少將大阪鎮臺司令官を免せられ陸軍少將高島駒之助之に代る十五年二月高島少將大阪鎮臺司令官を免せられ陸軍少將山地元治之に代る十八年五月鎮臺條例を改正し司令官は陸軍中將を以て充つること定められ陸軍中將子爵高島駒之助之に補せらる(歩兵旅團を編成せし當時大阪鎮臺に屬せし第七(長陸軍少將奥保榮司令官は大阪に在り)第八(長陸軍少將岡澤綱司令官は姫路に在り)の二旅團たりき)同年八月和歌山藩廳の建物を解きて本丸に移築し鎮臺本部の廳舎となしたり今俗に大廣間と稱するは即ち是なり二十一年師團司令部條例發布せられ大阪鎮臺を第四師團と改稱し鎮臺司令官を師團長に同本部を師團司令部と改む

二十五年八月大阪市上水道の工を起すに方り其貯水池を天主臺東側の地區に設け二十八年十月竣工してより以來櫻の宮水源地に於て精製せられたる水は蒸氣力に依り一旦此の貯水池に送られ此處より更に全市に流下し百有餘萬の市民を養ひつゝあり

明治二十八年四月征清の役に従ふ爲師團長は部下の諸隊を率ゐ出征したるも其の大連灣に上陸したる時は已に假條締結後にして休戦の時期に在り次で平和克復せられければ遼東半島の守備に任じ同年十二月歸還す翌二十九年大に軍備を擴張し全國に六師團を増設せらるゝや中部都督府を此に置き陸軍大將子爵佐久間左馬太都督に任じ第三、第四、第九、第十の四箇師團を統轄せり三十一年十一月陸軍特別大演習を舞、河、泉の平野に於て舉行せらるゝに際し

大元帥陛下此城に臨御あらせられ大廣間に御駐蹕親しく統監の勞を執らせ給へり三十四年中部都督府を東京に移し次で之を廢す

明治三十七年四月師團長は國下の諸部隊を率ゐ征露の大戦に參與する爲大阪港より乗船出發し遼東半島の一角貔子窩附近に上陸し金州南山を初めとし得利寺、蓋平、大石橋、海城、遼陽、沙河及奉天の各戦鬪に參加し大に錦城師團の名聲を揚げ翌三十八年十二月國民歡呼の裡に凱旋せり此戦後軍事諸般の需要に應じ城内に多數の建築物激増し終に今日の觀をなすに至れり

五 築城術より觀たる大阪城

築城とは工事を以て所要の地點を堅固にし軍隊の戦鬪力を保持増進

するを云ひ其の築設は必ず戦術上の要求に合致せざるへからざるのみならず我兵器の威力を發揚し敵の兵器に對し充分なる防禦力ならざるへからず而して戦術は又兵器の改良と共に進歩するものなるか故に戦術、兵器、築城の三者は互に相連繫して離るへからざる關係を有せり之を本邦築城術の沿革に徴すれば上古に於ては森林に據て戦ひしも隨所之を得る能はざるに因り或は柵を樹へ或は稻を積み後には土壘、石壘を設け以て森林の代用となしたり城(シロ)又語は實に此等構築物の總稱にして樹或は代用の意より斯くは稱したるか如し而して當時之に對する兵器は弓箭劍戟にして戦鬪は主として各個の自兵に依りて行はれたり爾後兵器の改良は顯著ならざりしも戦術は漸次進歩の域に入り隨て築城學理の發達を促致せり即ち桓

武天皇都を平安に遷させ給ふに方り區々たる城壁のみに依頼せず大に地形を利用し防備の堅實を圖り給ひしか如き平家源氏と一の谷附近に戦ふに際し城を以て攻撃動作の根據とせしか如き南北朝時代に至りては城を應用すること漸く多く且つ其位置の選定愈々巧妙となりしが如き是なり 後奈良天皇の天文十二年（皇紀二二〇三年）に鐵砲同二十年（皇紀二二一一年）に大砲（當時之を火石矢と稱す）傳來してより築城堅固の度一層を加へ織田氏豊臣氏の時に及びては城廓の規模を大にし石垣を築き高樓を設け以て防禦の爲のみならず攻撃にも之を利用し平時は城主以下軍に従ふ所謂武士なる者の住所となしたり 武士の田園を離れて一廓内に集まり武門の一族は純乎たる別階級となりしも 此時代にして本邦築城術は正に茲に其の面目を刷新した

徳川氏の時代に於ても斯の學術は深奥なる軍事學の二科として尊重せられたりしかは近世泰西の學術輸入せらるゝに及び多年の研鑽に依り斯術の素養深かりし本邦諸兵家學の忽ち更に研究する所となり 捨短採長終に今日歐米諸國に劣らざるの築城をなし得るに至りたる等孰れも皆兵器及戰術の改良進歩と相關聯せざるはなし而して大阪城は本邦築城術の大成せる時代に於て斯術の天才非凡なる豊臣秀吉が満身の知叢を絞りて建設せるものにして徳川氏修築の初め其經始を改めたること書に見ゆと雖もは一部の形狀に止まり其の骨幹に至りては秀吉の設計に係るもの今尚ほ存すと云ふも敢て不可なけん 即ち秀吉は此城を嬰守して戰鬪を持續せんとするの意なかりしを以

て單に城郭の壘壁を高うし塹壕を深くしたるに止まらず廣く比隣の地形に關する戰術上の利害を講究し遺憾なく之を利用し（大阪城地形尙事あるに臨みては今宮、天王寺、船場等に臨時築城を施すの準備ありたるが如く尙ほ此の平原に侵入せんとする敵を拒止するに足る地（東は山崎、國分、西は當時の淀川渡河點）を機に後ることなく占領するの計畫ありしもの如く又之を大にしては戰略上攻勢作戰の根據地となし併せて政策上の要地となしたる等最も其の要を得たるものなり蓋し秀吉は防戦堅固の城たらんよりは寧ろ防戦堅固の國たらんことを欲し防戦堅固の處たらんよりは尙ほ寧ろ防戦堅固の國たらんことを期したるへし是れ築城術の秘訣にして今日諸大家の論ずる所も亦之を復唱するに過ぎざるなり古來兵器の變遷と共に戰闘の手段は變化すと雖戰術

上の原則に至りては古今東西を通して不易なるは戰史を繙く者の等しく認むる所なり築城術に於ても亦然り其の施設の方法形狀等は兵器の改良戰術の進歩に隨ひ變遷すと雖之を設くる精神之を施す要訣は萬世の下不變不磨なり目下の大阪城は今日は進歩せる軍事工藝に對して其抵抗甚た強大なりと云ふへからざるも一たび天主臺趾に登り眸を放て附近の地形を眺め地圖を展へて近國の地勢を察して往時を追懐すれば南面山不落城の稱は當時敢て誇張の言にあらざりしを首肯せしむへし吾人常に秀吉の才畧に敬服するもの此に到りて其の雄渾なる築城術に於ける卓見に驚嘆する能はざると同時に秀吉に學ぶ所更に大なるを覺ゆ

大阪城沿革小史（終）

7-6A

明治四十四年十一月五日印刷
明治四十四年十一月十日發行

定價拾錢

不許
複製

發行兼印刷者
大阪市南區內安堂寺町貳丁目六拾九番地
吉田直次郎

印刷所
大阪市西區新町三丁目四十九番地
吉田直次郎工場

發行所
第四師團圖書印刷所
陸軍測量部地圖室印刷所
大阪市南區內安堂寺町谷町
越後屋至誠堂
東京日本橋區住吉町

